

『さんちき』の教材研究

大橋幸雄、木村直人、九津見幸男、高山裕一

1 はじめに

東京書籍「新編新しい国語1」(平成28年2月発行)に掲載されている『さんちき』は、児童文学作家吉橋通夫(1944年～)の短編作品である。吉橋は、1979年に『たんばたろう』で第2回毎日童話新人賞、1988年に『京のかざぐるま』で第29回日本児童文学者協会賞、2005年に『なまくら』で第43回野間児童文芸賞を受賞している。『さんちき』は、『京のかざぐるま』(1988年に岩崎書店より発行。2007年に「シリーズ本のチカラ」の1作として日本標準から発行。)に収録されている7編のうちの1編である。作者自身によるあとがき(注1)によれば、「10歳前後から商家や職人のところへ住みこんで、働くことが当たり前だった江戸時代」を舞台に、「なんのために働くのかという、はっきりした目的を持っている」子どもたち、「自分が納得できる目的があるから、つらくても、やりとおせる」子どもたちの姿を描いた作品である。

『さんちき』を教材研究するにあたって、分析批評を応用して、「中心内容」、「視点」、「行動描写」、「背景描写」、「状況描写」、「伏線」を中心に読み解いてみる。

2 『さんちき』の「中心内容」

八つおのときに「車伝」に弟子入りして五年になる三吉は、祇園祭りの鉾の車の矢を作る仕事を、親方から一本だけ任された。三吉は、見事に作り上げた嬉しさから、夜中にそつと起き出して矢に自分の名前を彫ろうとしたのだが、慌てて彫ったために「さんきち」が「さんちき」になってしまう。親方は、自分の名前を彫ろうとした三吉の思いを受け止め、「さんちき」の裏に日付を彫ってやった。そして、百年も持つ車大工の仕事のすばらしさや三吉が腕のいい車大工になっているであろう未来を語って聞かせる。それを聞いて、三吉は必ずや一人前の車大工になろうと決意する。

3 『さんちき』の「視点」

「視点」とは、『さんちき』が誰の目を通して語られているかということである。

- ・ところが、あの口うるさい親方が、……(41ページ14行)(注2)
- ・弟子入りしてから初めて必死でやった。親方の細かい注意も真面目に聞いた。

(41ページ18行)

- ・体が震えた。そこら中走り回って叫びたかった。(41ページ22行)
- ・彫ってしまえばこっちのものだ。なんぼ親方が怒鳴っても消えることはない。

(42ページ4行)

など、三吉の心情が直接的に語られている描写（「心理描写」あるいは「心情描写」）が、作品の早い段階から何か所も見られ、それは、

・怒られるかなと思ったけど、何も言われなかった。（49 ページ 8 行）

と、作品の後半になっても変わらないので、「三吉」の視点で語られていると言える。したがって、この後論じる「行動描写」も「背景描写」も「三吉」の心情を読み取っていくことになる。

4 『さんちき』の「行動描写」、「背景描写」、「状況描写」、「伏線」など

作品の冒頭から順を追って、注目したい「行動描写」、「背景描写」、「状況描写」、「伏線」などを取り上げてみる。

(1) 夜中にそっと起き出した三吉が車の矢に名前を彫る場面

①「今日、親方と二人で作りあげた祇園祭りの鉾の車が、どっしりと立っている。」

(41 ページ 2 行)

背景描写。鉾の車が、三吉には「どっしりと立っている」ように感じられた。心をこめて作り上げたので少しの後悔もない、自分にもこれだけのものが作れたという三吉の自信が伝わってくる。また、車の大半を作り上げた親方への尊敬の念やゆるぎない信頼も感じられる。「見上げると、また、ため息が出た。」（41 ページ 4 行）のため息は、半人前の自分が作った矢のできあがりのよさへの感動から洩れたため息である。

②「その一本を握って揺すってみる。こそっともしない。」（41 ページ 8 行）

三吉の行動描写。三吉が初めて自分の力だけで作った矢なので、どれが自分のものかはすぐに分かった。矢そのものの出来には自信があったが、組み立てられた車の一部としての役目には不安な気持ちもあった。そこで、まずはそっと揺すってみる。矢がこそっとも動かないので、三吉の不安は消え去り、自信が確かなものになった。

③「自分が任されたカシの木の本の一本の矢が、白く輝いて見えた。」（41 ページ 25 行）

背景描写。矢を作るのを一本だけ任されて、初めて必死で仕事をやり、いつもなら半分も聞いていない親方の細かい注意も真面目に聞いて作り上げたことに感激している。そして、車を引き起こしたときに体が震えるほどの感動を覚え、「おらも、いっしょに作ったんやで！」と、そこら中走り回って誰彼となく叫びたくなった。そんな自慢の矢は、三吉には他の矢とは全く違う存在として白く輝いて見えるのである。

④「親方とおかみさんが寝てしまうのを待って、夜中にそっと起き出してきた。」

(42 ページ 2 行)

三吉の行動描写。自分が作り上げた矢に自分の名前を彫りたいと思った三吉は、親方に相談すれば叱られるに決まっていると思い、親方が知らないうちに彫ってしまおうと考えた。この矢に自分の名前をずっと残したい、彫ってしまえばどんなに親方に怒鳴られても

構わないという強い意志を持って、親方とおかみさんが寝てしまうのをじっと待っていた。

⑤「このごろ、京都の夜は怖い。……つい三日前にも、すぐ近くの三条大橋で斬り合いがあった。」(42 ページ 11 行)

時代の状況描写。京都の町は、幕末の混乱の真っ只中であつた。幕府の政治のやり方に反対する尊王攘夷派の侍たちと、その侍を取り締まる新選組が対峙し、斬り合いを繰り返していた。無残な殺し合いが次々と起こり、世の中がどうなっていくのかが全く見えない乱れ切った日常の中で町の人々は生活を送っていた。そんな中で、三吉と親方は車大工として日々仕事に励んでいる。

⑥「三吉は、急いで『ん』の字に取りかかった。気が焦って、なかなか思うようにいかない。」(42 ページ 25 行)

三吉の行動描写。親方が目を覚ます前に自分の名前を彫り込んでしまいたいのと、侍たちの斬り合いに巻き込まれることがないようにできるだけ早く明りを消したいのとで、気が焦る。気が焦る分、なかなか思うように『ん』を彫り込むことができない。

⑦「続いて三字目も彫り終わり、残るはあと一字だけになった。」(43 ページ 2 行)

「さんきち」の並び順を間違えたことに気付く場面への伏線。一字目は、「道具箱の中からのみを取ってきて、ろうそくの明かりを頼りに、『さ』の字から掘り始めた。」(42 ページ 9 行)とあり、二字目は、「三吉は、急いで『ん』の字に取りかかった。」とあるのに対して、三字目は「き」ではなく「三字目」と表現されている。三吉は「き」のつもりで三字目を彫り終えたが、親方の指摘で「さんきち」を「さんちき」と彫ってしまったことに気付く。そこから、まだ半人前でおっちょこちょいなどころがある三吉の性格や、夜に明かりをつけておく物騒な時代背景を読み取ることができる。そして、このことがきっかけになって、親方の仕事への思いや三吉への期待が語られていく。間違えて彫ってしまった名前の「さんちき」がこの物語の題名になっている。

(2) 起きてきた親方と三吉が矢に字を彫っていく場面

⑧「いきなり親方の怒鳴り声がかつた。」(43 ページ 4 行)

三吉の心理的状況描写。親方が目を覚ます前に名前を彫ってしまおうと思っていたのに、とうとう親方に見つかってしまう。静かな仕事場と三吉の頭の中に親方の怒鳴り声だけが鳴り響いている。三吉の緊張した様子が伝わってくる。

⑨「ところが親方は、『物騒やないか!』と怒鳴った。」(43 ページ 10 行)

三吉の心理的状況描写。「ろうそくが、もったいないやないか!」と怒鳴られると思って慌ててろうそくの明かりを吹き消した三吉だが、親方は、「物騒やないか!」と怒鳴った。親方は、何よりも三吉の身を一番に思って怒鳴ってくれた。愛情のこもった怒鳴り方である。

⑩「答えるより早く、次の言葉が飛んできた。」(43 ページ 20 行)

三吉の心理的状況描写。三吉を一人前の車大工に育てようとしている親方に見れば、怒鳴らなければならない場面は数えきれないほどある。三吉にとって親方から怒鳴られるのはしょっちゅうだから、怒鳴られたときの対処法が自然と身につけてしまった。こんなときはしょんぼりしているのに限り、しょんぼりすればするほど、親方の怒鳴り声は小さくなっていくのである。しかし、親方の最初の怒鳴り声に慌ててろうそくの明かりを吹き消していたので、いくらしょんぼりしても親方には見えないから、親方の怒鳴り声は小さくなっていくことがなく、次の怒鳴り声が飛んでくるので、また緊張してしまうのである。

⑪「三吉は、激しく首を振った。」(43 ページ 28 行)

三吉の行動描写。親方から「答えられへんところを見ると、車になんぞ悪さをしていたな。」といった親方の言葉に、絶対に悪さはしていないと否定している。毎日親方の仕事ぶりを見ている三吉にすれば、作り上げた車に悪さをすることなどこれっぽっちも考えたことはないであり、疑われること自体が心外なのである。

⑫「『あほう、侍が怖くて車大工がつとまるか。』」(43 ページ 40 行)

親方の仕事に対する考え方。車大工としての仕事のためなら、明かりがついていることで侍にどんな言いがかりをつけられようが、決して恐れることはないと考えている。さっき「物騒やないか！」と怒鳴られた三吉に見れば、侍なんか怖くないという親方の言葉は理屈に合わないと思っている。

⑬「とたんに親方が怒鳴った。」(44 ページ 5 行)

三吉の心理的状況描写。これも愛情のこもった怒鳴り方である。自分の気に入った車が作れたとき、名前をそっと彫っておくことは知っていた三吉だが、裏に彫るものだと知らずに表に彫ってしまった。そんな三吉に、親方は、怒鳴ってはいるが「自分の名前は、人様の目障りにならんように車の裏に彫るもんや。」とやさしく教えてくれた。

「首をひねって考えていると、親方がまた怒鳴った。」(44 ページ 16 行) も「それでもおろおろしていると。また怒鳴られた。」(45 ページ 21 行) も、同じように親方の優しさのこもった怒鳴り方である。

⑭「慌てて一字一字ゆっくり見た。」(44 ページ 13 行)

三吉の行動描写。親方から彫った字が間違っていると言われて、ただただ慌てている。四つのひらがなをゆっくり丁寧に確かめようとするが、慌てているので一字一字を見ただけで、肝心の「さんきち」という並び順の違いには気が付いていない。自分の名前だけに並び順を間違えているとは思ってもいない。

⑮「慌てて、『ち』の字を手でごしごしこすった。」(45 ページ 4 行)

三吉の行動描写。親方に間違いを指摘され、まさかそんなところが間違っているとは思ってもいなかったのも、いっそう慌ててしまっている。間違いを消したい一心で、彫った字をごしごしこするという行動をとらせた。

⑯「『一度彫り込んだもんはなあ、車がなくなるまで消えへんのや。』」(45 ページ 7 行)

最後の場面で、車大工の仕事のすばらしさや三吉が腕のいい車大工になっているであろう未来を語って聞かせる親方への伏線。ここでは、間違っ彫り込んだものは、間違っまままで、車がなくなるまで消えないと三吉を諭す親方だが、三吉の作った矢はこのあと車なくなるまで残り、百年後の人たちには名前の彫り間違いとしてではなく、ちょっと変わった名前だが腕のいい大工だったと評判になっているという最後の場面の親方の言葉と呼応する。

⑰「三吉は、しょんぼりとうなだれた。今度のしょんぼりは、本当のしょんぼりだ。」

(45 ページ 11 行)

三吉の行動描写。親方から「もうどうしようもあらへん。」ときっぱりと断言されて、すっかりしょげかえっている。「今度のしょんぼりは」というのは、「物騒やないか！」と親方に怒鳴られたときに、親方の怒りを鎮めるためにしょんぼりしてみせたのとは違い、ここでは本当にしょんぼりしてしまっている。

⑱「それでもおろおろしていると、また怒鳴られた。」(45 ページ 21 行)

三吉の行動描写。「さんちき」という間違っ名前がなかなかおもしろいと親方から言われ、しかもその間違っ名前を最後まで彫ってしまえと繰り返し言われて気持ちは焦っているが、それでも気が進まずにどうしたものかとおろおろしている。

⑲「三吉は、しかたなくのみを持ち上げた。」(45 ページ 24 行)

三吉の行動描写。間違っ自分の名前を最後まで彫るのは気が進まないが、「物騒やないか。」と親方に言われては彫り上げるしかない。いやいやながらのみを持ち上げた。

⑳「けっこう楽しそうにやっている。なかなか終わりそうにない。」(46 ページ 7 行)

三吉の心理的状況描写。親方は三吉には難しそうに見える字を次々と楽しそうに彫っている。「はようせんと、物騒やないか。」と怒鳴っていたのに、仕事が始まるとそんなことはすっかり忘れてしまっているようで、なかなか終わりそうになく、三吉の方が心配になってしまう。

㉑「親方がその次をしゃべるより早く、三吉が後を続けた。」(46 ページ 14 行)

三吉の行動描写。親方と一緒に車作りの仕事をしながら、「わしらののみの先にはな。」の話をもう五回も聞かされている。それは、車大工の心意気が伝わってくる、三吉も大好きな言葉なので、すっかり頭に入ってしまったいて、いつでもその言葉を復唱することができた。三吉は、得意気に、嬉しい気持ちで親方の言葉の後を続けた。

(3) 家の外で侍が切られた場面

㉒「二人はびくっと顔を見合せた。親方がろうそくを指差すと同時に、三吉が吹き消した。」

(46 ページ 37 行)

三吉の行動描写。外から聞こえてきた物が倒れるような音を聞いて、二人は瞬時に物騒なことが起こったと思った。そして、自分たちの身に危険が及ぶかもしれないと思ひびく

っ顔を見合せた。二人は無言のうちに次にすべきことを瞬時に悟り、ろうそくの灯を吹き消した。三吉の緊張感や不安感は一気に高まった。

㉓「だが、それっきり何も聞こえない。……何も起こらない。……やっぱり何も起こらない。」(46 ページ 39 行)

三吉の心理的状況描写。暗闇の中で、三吉は、耳を澄まして状況を把握しようとしている。斬り合いで一方が切られて倒れたとすれば、切った方の話し声か足音が聞えてくるに違いないと思い、それを聞こうとしている。しかし、物が倒れたような音以外には何も聞こえてこない。親方が外の様子を確かめようと戸を細く開けたので、ほんの小さな変化も見逃すまいと五感を研ぎすますが、何も起こらないからいっそう不安になる。

㉔「動いているものはない。ただ暗い闇が広がっているだけだ。」(47 ページ 4 行)

三吉の心理的状況描写。確かに物が倒れたような音がしたはずなのに、動いているものが何もない。目を凝らして見ても、暗い闇が広がっているだけなので、いっそう不安感が高まる。

㉕「そこだけ、道の端が黒く盛り上がり、そばには、白く細長いものが落ちている。」(47 ページ 8 行)

三吉の心理的状況描写。親方が指差した方を目を凝らしてみると、黒く盛り上がりしているものと白く細長いものが見えた。外の闇にまだ目が慣れていないため、それが何なのかははっきりとは分からないが、何もなかったのではなく、間違いなく何かが起こったのだと確信した。不安な気持ちの中で緊張感が一気に高まった。

㉖「知らぬ間に、手が親方の着物の袖をぎっちり握りしめていた。」(47 ページ 22 行)

三吉の行動描写。夜の京都の町が物騒なことは知っていた。三日前にも、すぐ近くの三条大橋で斬り合いがあったばかりだ。そんな斬り合いが、車伝のすぐ前で起こった。そして、一人の侍が斬られて倒れている。初めてそんな物騒な場面を目の当たりにして、一人になるのが怖くて怖くてどうしようもなく、親方から離れたくないという気持ちから、知らない間に袖をしっかりと握りしめていた。

㉗「いきなり、その目がぐわっと開いた。にらみつけるように、こちらを見る。」(47 ページ 26 行)

三吉の心理的状況描写。侍の顔をのぞき込んだとたん、その目が開き三吉をにらみつけるように見るので、あまりの緊張感から一步も動くことができない。

㉘「三吉は、やっと口を開いた。」(48 ページ 2 行)

㉗で親方と顔を見合わせてからずっと口を開くことがなかった三吉だったが、ここでようやく口を開いた。親方の言葉かけに、三吉は、ずっと声も出せずにいた恐怖感からやっと解放されて、少しほっとしている。

㉙「戸を閉めて、心張り棒をぎっちりとする。」(48 ページ 3 行)

三吉の行動描写。斬った方の侍たちが戻ってきた足音が聞えたので、決して関わらない

ようにと急いで家の中に戻り、何があっても明けられないことがないようにと、心張り棒をいつにも増して力を入れてぎっちりとした。

③⑩「やがて、三、四人の足音が表で止まった。鋭く低い声がしたかと思うと、すぐに、足音が、もと来た方へ引き返していき、次第に遠くなって消えた。」(48 ページ5行)

三吉の心理的状況描写。足音が止まったので、これから何が起こるのだろうと緊張感がいっそう高まった。自分たちが家の中で聞き耳を立てていることは決して気づかれないように、一方外で起こることは決して聞き逃すまいと三吉の緊張感は頂点に達している。

③⑪「何もなかった。倒れていた侍も刀も消えていた。」(48 ページ8行)

三吉の心理的状況描写。道に何もなくなっていたことに、少しほっとしている。倒れていた侍と刀を見た以上、何らかの関わりを持たなければならなかったはずだが、そうせずに済んでよかったと胸をなでおろしている。

(4) 親方が三吉に語りかける場面

③⑫「親方は、三吉が作った矢を握ってぐいと引いた。びくともしない。」(49 ページ19行)

②の三吉の行動描写に照応。三吉の場合は不安な気持ちもあったので、まずはそっと揺すってみたが、三吉の仕事ぶりを見ていた親方には、びくともしないことは保証済みだったので、力をこめてぐいと引いている。

③⑬「三吉は親方の腰をぎゅっと押した。」(49 ページ8行)

三吉の行動描写。親方に褒められて照れている。その照れ隠しとして親方の腰をぎゅっと押した。

③⑭「そっとつぶやいてから、思い切り息を吸い込んで、ろうそくの明かりをひと息で吹き消した。」(49 ページ20行)

三吉の行動描写。これからも精一杯の仕事を続けて、腕のいい車大工になることを自分に誓った。「さんちきは、きっと腕のええ大工になるで。」と、「三吉は」でなく「さんちきは」といったのは、親方の話を聞いて、彫り間違いの名前でなく百年後には腕のいい大工の名前になっていることを願い、明日からいっそう頑張ろうという気持ちをこめてろうそくの明かりを吹き消した。親方に怒鳴られて消した場面、外の物音に反射的に消した場面とは対照的な場面である。

5 その他の『さんちき』の表現の特色

(1) 三吉と親方の会話

43 ページ4行の「起きてきた親方と三吉が矢に字を彫っていく場面」から末尾までは、225 行中で親方と三吉の会話の部分が 112 行と全体の二分の一を占めている。この会話からは、二人の心情にとどまらず、親方の車大工としての誇り、三吉を厳しくも温かく見守り育てている親方の姿、親方を信頼してついていく三吉の姿なども読み取ることができる。

(2) ろうそくの明かり

ろうそくは、三吉の手で二度、親方の手で一度ともされ、三吉の手で三度消される。

始めにともされるのは、三吉が親方に内緒で自分の名前を彫る場面であり、三吉が焦る気持ちの中で名前を彫っていく姿が描かれる。

その明かりは親方の怒鳴り声にびっくりした三吉の手で消され、闇の中で、自分の名前を彫りたかった三吉の思いが親方に語られ、親方に分かってもらうことができた。

親方が三吉の彫った名前を見てくれることになり、三吉の手で二度目の明かりがともされる。親方に教えてもらいながら、親方と二人の仕事が進んでいく。

その明かりは、突然家の外から聞こえてきた音で、慌てて消される。闇の中で、二人は外の様子に聞き耳を立て、戸を開けて外の様子を伺い、侍同士の斬り合いがあったことを知る。

三度目の明かりは親方の手でともされ、その中で、親方の車大工として心意気と三吉への思いが語られる。そして、腕のいい大工になろうと決心する三吉の手で明かりが消されて物語は終わる。

6 『さんちき』の学習目標

『さんちき』の学習の目標は、「場面の様子や登場人物の思いに注意して、作品を読み味わう。」(40 ページ)と設定されている。

4では、

- (1) 夜中にそっと起き出した三吉が車の矢に名前を彫る場面
- (2) 起きてきた親方と三吉が矢に字を彫っていく場面
- (3) 家の外で侍が切られた場面
- (4) 親方が三吉に語りかける場面

と4つの場面に分けて読み取って見たが、5の(2)のろうそくの明かりを重ね合わせてみると、

- (1) 三吉が親方に内緒で自分の名前を彫ろうとろうそくの明かりをともした場面
- (2)の前半 親方の怒鳴り声に慌てて三吉が明かりを消した場面
- (2)の後半 親方に言われてしかたなく三吉が明かりをつけた場面
- (3) 外の音に親方と二人でとっさに明かりを消した場面
- (4) 親方が明かりをつける場面
- (4)の末尾 三吉が気持ちをこめて明かりを消す場面

となる。

ろうそくの明かりのともされた場面と消された場面の中で三吉と親方の心情などが見事に描き分けられていることに着目して、読み味わわせたい。

〈引用文献〉

注1 吉橋通夫、2007年6月、『京のかざぐるま』、日本標準

注2 吉橋通夫作『さんちき』、新編新しい国語1、平成28年2月10日、東京書籍、
41～49 ページ

〈参考文献〉

1 長尾高明、「鑑賞指導のための教材研究法」、1990年2月、明治図書出版

2 「新編新しい国語1 教師用指導書研究編上」、東京書籍

3 渡邊美雄、「文学テキストが国語教室にもたらすもの——実践報告『さんちき』（吉橋通夫）——」、2000年3月、日本文学